

日蓮大聖人御書全集

じょうぞうじょうげんごししょうそく

浄蔵浄眼御消息

新版
2007
〜
2009

浄蔵浄眼御消息

けんじ こうあんき まつのどのふさい

建治・弘安期 松野殿夫妻

生 米 たわらひと うりこひと ねいも しなじな ものた そうら お

きごめの俵一つ・瓜籠一つ・根芋、品々の物給び候い畢

わんぬ。

らいとく なづ ちようじや み い わ み め こ

楽徳と名付けける長者に身を入れて、我が身も妻も子も、

よる ひる せ つか もの あま せ

夜も昼も責め遣われける者が、余りに責められ、堪えがた

かく たこく い くに だいおう みやづか

さに、隠れて他国に行つて、その国の大王に宮仕えけるほ

切 者 な かんぱく な のち くに ちから

どに、きりものに成つて関白と成りぬ。後にその国を力と

わ もと しゆ くに う と とき もと しゆ

して、我が本の主の国を打ち取りぬ。その時、本の主、こ

の関白を見て大いに怖れ、前に悪しく当たりぬるを悔い

返 かんぱく み おお おそ さき あ あ く

かえして宮仕え、様々の財を引きける。前に負けぬる物の

おも みやづか ようよう たから ひ いのち 生 励

ことは思いもよらず、今はただ命のいきんことをはげむ。

ほけきよう いま ほけきよう どうほう やくしぶつ

法華経もまたかくのごとく、法華経は東方の薬師仏の主、

なんぼう さいほう ほつぼう じょうげ いっさい ほとけ しゆ しゃかぶつとう

南方・西方・北方・上下の一切の仏の主なり。釈迦仏等の

ほとけ ほけきよう もんじ うやま たも たみ おう おそ ほし

仏の法華経の文字を敬い給うことは、民の王を恐れ、星の

つき うやま われ しゆじよう だいろくてん まおう

月を敬うがごとし。しかるに、我ら衆生は、第六天の魔王

そうでん もの じごく がき ちくしやうとう お こ いき 吐

の相伝の者、地獄・餓鬼・畜生等に押し籠められて気もつ

ちやうせきごくそつ つ せ ほけきよう

かず朝夕獄卒を付けて責むるほどに、とかくして法華経に

懸かかり付つきぬれば、釈迦しゃか仏ぶつ等の十方じつぽうの仏ほとけの御子みことせさせ給たま

えば、梵王ぼんのう・帝釈たいしゃくだにも恐おそれて寄より付つかず。いかにいわん

や、第六天だいろくてんの魔王まおうをや。魔王まおうは前さきには主しゅなりしかども、今は

敬うやまい畏おそれて、「あしゆうせば、法華經ほけきよう・十方じつぽうの諸しよ仏ぶつの御見参ごげんざん

に、あしゆうや入いらんずらん」と恐おそれ畏かしこみて供養くようをなすな

り。いかにしても、六道ろくどうの一切衆生いっさいしゆじようをば法華經ほけきようへつけじと

はげむなり。励

しかるに、いかなることによおわすらん、皆人みなひとの憎にくみ候そうろう

日蓮にちれんを不便ふびんとおぼして、かく遙々はるばると山中さんちゆうへ種々しゆじゆの物送ものおくりた

思おもはるばるさんちゆうしゆじゆものおく給給

そうろう

いちどにど

び候こと、一度二度ならず。ただごとにあらず、ひとえ

しゃかぶつ

い か

たま

後

たま

に釈迦仏の入り替わらせ給えるか。またおくれさせ給いけ

おんきんだち

みほとけ

たま

ふぼ

みちび

る御君達の、御仏にならせ給いて、父母を導かんために

みこころ

い か

たま

御心に入り替わらせ給えるか。

みようしようごんのう

もう

おう

あくおう

おんたいし

妙莊嚴王と申せし王は、悪王なりしかども、御太子、

じようぞう

じようげん

みちび

たま

ふぼふたりとも

ほけきよう

浄蔵・浄眼の導かせ給いしかば、父母二人共に法華経を

ごしんようあ

ほとけ

成

たま

御信用有って、仏にならせ給いしぞかし。これもさにてや

そうろう

奇

おぼ

そうろう

候らん。あやしく覚え候。

かいこう

かた

つね

ひと

見

目かたち

すぐ

そうら

甲斐公が語りしは「常の人よりもみめ形も勝れて候い

うえ ころろ なお ち えかしこ

なにごと

し上、心も直くて智慧賢く、何事につけてもゆゆしかり

ひと と 果 無 な あわ おも そうら

し人の疾くはかなく成りしことの哀れさよと思ひ候いし

おも こ亡 ゆえ はは どうしんじや

が、またつらつら思えば、この子なき故に、母も道心者と

ちち ごせしや な そうろう おぼ そうら

なり父も後世者に成つて候は、ただとも覚え候わぬに、

みなひと にく そうろうほけきよう つ たま

また皆人の悪み候法華経に付かせ給えば、ひとえにこれ、

亡ひと ふたり おんみ そ すす まい そうろう

なき人の二人の御身に添つて勧め進らせられ候にや」と

もう おぼ そうろう

申せしが、さもやと覚え候。

やむぎのき おも そつら

前々はただあらましのことかと思つて候えば、これほど

おんころろざし ふか そうら はじ し そうろう

御志の深く候いけることは始めて知つて候。また、

そら

暗

やみ

つき

い

もしやのこと候わば、くらき闇に月の出ずるがごとく、

みようほうれんげきよう

ごじ

つき

あらわ

たも

つき

なか

妙法蓮華経の五字、月と露れさせ給うべし。その月の中に

しゃかぶつ

じつぼう

しよぶつ

ないしさき

た

たま

ごしそく

あらわ

は、釈迦仏・十方の諸仏、乃至前に立たせ給いし御子息の露

たも

おほ

くわ

もつ

れさせ給うべしと思しめせ。委しくはまたまた申すべし。

きようきようきんげん

恐々謹言。

しちがつなのか

七月七日

にちれん

日蓮

かおう

花押